

インタビュー (その1)
—ランブソンのマリオ先生—

広報担当 佐々木真紀子

ランブソン小学校の卒業式に出席した際、マリオ先生にインタビューしてきました。

ランブソン小学校は、HANDS が支援しているコミュニティの中でもっとも在校生が多く、1年生から6年生まで合わせて約140名の生徒が在籍していますが、教室は4つしかありません。

* * * * *

佐々木 (以下S) : このコミュニティの問題点はなんでしょう。

マリオ先生 (以下 M) : 水です。小さな水源しかありません。タンクを2つ設置し (左下写真) 雨水を貯めています。住民は協力的で強固なパイプシステムがあります。何かあれば住民皆で一緒に働きます。

S : 18名の卒業生のうち、HANDS の奨学生は3名だけでしたが、少なくありませんか。

M : そうですね、少ないです。特に6年生まできてやめざるを得なかった子どもはとても泣きます。「先生、わたしやめたくない」と泣く子が何人もいました。

S : 途中でやめざるを得ない子どもを救済する方法を考えたいですね。HANDS は現在、小学生、ハイスクール生徒、カレッジ学生に奨学金を支給していますが。

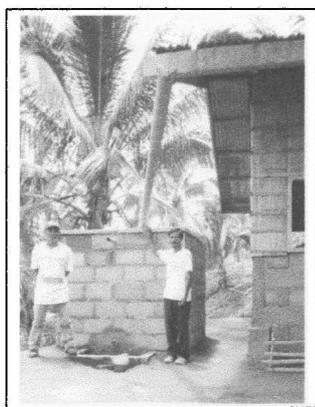
M : 初等教育はとても重要です。

S : 小学校を続けられない理由は何故でしょう。

M : 距離と親の収入です。遠い子は1時間半かけて山を上り下りして学校に来ます。それが続けられるのは学校が楽しいからだと思います。しかし親の収入がなく、続けることが困難になります。ここでは1日3食、食事を取ることができる家庭はまれです。1日1食の家庭もまだたくさんあります。換金作物を栽培するなどの指導を月1回のミーティングで行っています。

S : ドロップアウトした子どものその後はどうなるのでしょうか。

M : 女の子は結婚させられます。早婚は子どもの体に良くありません。



S : 学校の先生と農業指導の両立は大変ですね。

M : 小さな子どもを教えるのは大変ですが楽しいです。両立は確かに難しいです。

農業指導をしようにも住民は遠く離れて住んでいますし。

S : フィリピン国内のNGOはこの村に来ていますか。農業指導、セミナー、収入向上などの指導は日本より進んでいると思いますが。

M : そういったNGOはこのコミュニティには来ていません。来てくれて農業指導をしてくれれば、私も助かります。水源については、この夏休みに探してみる予定です。

* * * * *

CMBディレクターのヴィック神父に尋ねたところ、教室2部屋と図書館の増築を計画しているそうです。材料さえ購入できれば、生徒の親たちが建設を手伝います。

ドロップアウトせざるを得ない子どもたちについては、事務局とCMBで検討していきたい懸案です。



<水で苦勞するマリオ先生>
5年前に FIDR の助成金で HANDS が支援した校舎、屋根の雨水を集めるタンク、湧き水利用の簡易水道のうち、学校の脇の谷にある湧き水は水質・量ともに期待はずれ。特に乾季のポンプはむなしい音を出すだけです。